



DTS (証券コード:9682) 収益構造の多角化が加速。AI/量子インフラで SIerの再定義に挑む、高還元成長株

エグゼクティブサマリー

DTSの2026年3月期第3四半期決算は、前年から今年上期まで続いていたメガバンク特需の反動を除けば、自律的な成長フェーズが続いていることを示した。累計の業績数値は売上高・利益ともに過去最高を更新した。

「最高益」の質的变化：メガバンクの大型案件ピークアウトによる減収を、住宅関連ソリューションといったEAS (Enterprise Application Services) 等や自治体向け消防システムの高収益領域が補完し、連結営業利益は前年同期比19.2%増の過去最高を更新。

フォーカスビジネスの進展：中期経営計画の最終目標（比率57%）を前倒しで上回り、売上構成比は61.8%に到達。高付加価値型のビジネスへの構造転換が着実に進展している。

AI・量子インフラでの実績：理化学研究所から「量子HPC連携プラットフォーム」を受注。AIを「使う」需要だけでなく、計算基盤を「構築する」領域で優位なポジションを確保。

安定したデリバリー品質：徹底した管理により不採算案件が僅少。営業利益率は12.5%（前年比+1.1pt）へ上昇。

積極的な還元姿勢：継続した増配、自己株式の取得・消却、株式分割を実施。総還元性向73.9%（予想）と、株主価値の最大化への強いコミットメントを維持。

KEY STATISTICS



主要株価指数

直近株価(2026/03/06)	¥1,117
52週高値・安値	¥1,362/¥851.2
発行済株数	163,954,928株
時価総額	178,000百万円
PER	15.5倍
PSR	1.3倍
配当（配当利回り）	¥35.00 (3.14%)

Sector

セクター	情報・通信
------	-------

財務指標(2026/03期予想)

売上	135,000百万円
売上高営業利益率(%)	11.5%
売上高EBITDA比率(%)	N/A

Management

President & CEO	北村友朗
URL	https://www.dts.co.jp/



GIR View

銀行案件の反動を他領域でカバーする回復力

Global IRは、DTSが依然として銀行セクターを主要顧客としながらも、そのサイクルに翻弄されない柔軟さを備えつつある点に注目する。第3四半期では、銀行向け開発の減収を、自治体向け消防システムの更改や金融犯罪対策ソリューション「AMLion」の導入が力強くサポートした。これは、メガバンク依存の解消とまではいえないが、ポートフォリオの多角化によるリスク分散が機能し始めている証左である。

フォーカスビジネス比率の上昇と収益性の向上

フォーカスビジネス比率が61.8%に達したことは、単なる数字以上の意味を持つ。クラウド、セキュリティ、AIといった領域は、人月積算型の従来ビジネスと比較して生産性が高く、売上の伸び(+8.1%)を上回る営業利益の伸び(+19.2%)をもたらす構造的なドライバーとなっている。

AI・量子インフラ領域における優位なポジション

理化学研究所からの量子HPC連携プラットフォーム受注は、DTSが単なるソフトウェア開発会社ではなく、最先端インフラの構築者であることを証明している。生成AIの爆発的普及に伴うインフラ実需を、NVIDIAの高性能GPUチップや温水冷却技術などを駆使した国家レベルのプロジェクトとして受注できた実績は、今後の民間データセンター向け案件獲得において強力なレファレンスとなる。

精力的な株主還元

25億円の自己株式取得を完了し、かつ全株を消却。さらに配当性向を維持しながらの連続増配。1対4の株式分割による投資単位の引き下げ。これらはすべて、株主資本利益率(ROE)の向上と株主価値の最大化を経営の最優先課題としている証左である。2026年3月期の総還元性向73.9%(予想)という数字は、投資家に対する同社の揺るぎない誠実さを示す。



Figure 1 連結財務ハイライト

指標名	2026年3月期 第3四半期 (億円)	2025年3月期 第3四半期 (億円)	前年同期比 (YoY)	通期予想に対する 進捗率
連結売上高	983.3	910.0	+8.1%	72.8%
売上総利益	222.7	203.0	+9.7%	73.0%
営業利益	123.2	103.3	+19.2%	79.5%
経常利益	127.3	106.2	+19.8%	80.4%
純利益	85.2	71.9	+18.5%	78.2%
EBITDA	133.4	111.5	+19.6%	79.9%

出所：決算報告会資料、決算短信をもとに Global IR, Inc.作成



業績分析：銀行特需の剥落を跳ね返す真の収益力

連結業績概況

2026年3月期第3四半期の連結累計実績は、売上高 983.3 億円（前年同期比 8.1%増）、営業利益 123.2 億円（同 19.2%増）、経常利益 127.3 億円（同 19.8%増）、親会社株主に帰属する四半期純利益 85.2 億円（同 18.5%増）と、すべての利益指標において過去最高を更新した。

好調な決算の背後には、前年度に存在したメガバンク向け大型案件の反動減が他の成長領域でカバーされているというストーリーがある。アナリスト目線からは、この「マイナスを埋めてプラスを創出する力」こそが最も高く評価すべきポイントである。

セグメント別状況

業務&ソリューションセグメント

実績は売上高 394.5 億円（前年同期比 1.4%増）、営業利益 54.8 億円（同 17.3%増）だった。

メガバンク向けの大型開発がピークアウトしたことで、銀行向け売上自体は減少した。しかし、自治体向けの消防システム更改案件が大幅に拡大し、これを完全にカバーした。消防システムは同社の自社ソリューションを活用しており、受託開発よりも利益率が高い。また、金融犯罪対策ソリューション「AMLion」の導入がネット銀行や大手金融機関で進んだことも、収益の質を高めている。銀行への依存の軽減と公共分野の強化が、営業利益 17.3%増という形で結実している。

テクノロジー&ソリューションセグメント

実績は売上高 340.6 億円（前年同期比 8.9%増）、営業利益 42.5 億円（同 24.6%増）だった。

先期に続き最も高い利益成長を記録したセグメントである。証券会社向けのクラウド基盤更改や、人材派遣・IP ビジネス会社向けの基幹システム刷新が好調に推移した。特に「EAS 領域（ServiceNow, intra-mart, mcframe 等）」の拡大が顕著であり、これらプラットフォームを活用した開発は、スクラッチ開発に比べてデリバリーが迅速で利益率も安定している。前年度に指摘されていた不採算案件が今期は一掃されており、デリバリーの質の向上がそのまま利益率改善（前年同期比+1.2pt）に直結している。

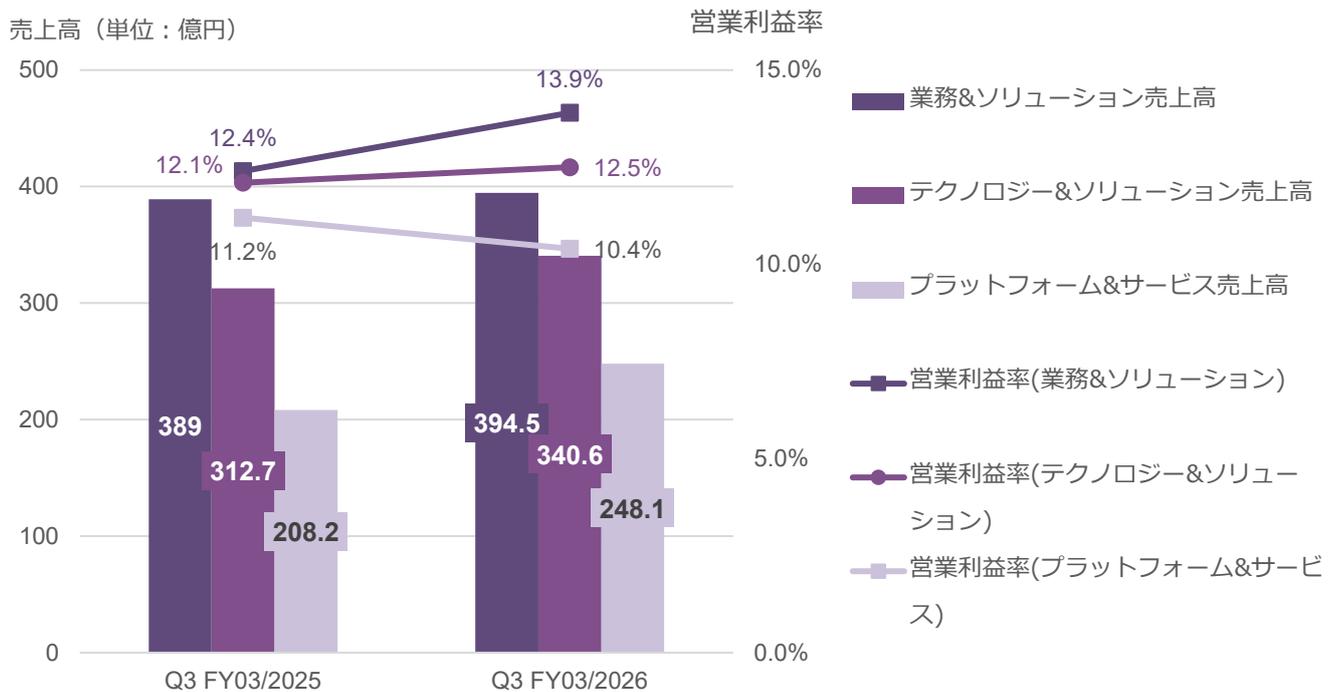
プラットフォーム&サービスセグメント

実績は売上高 248.1 億円（前年同期比 19.2%増）、営業利益 25.8 億円（同 15.2%増）だった。

生成 AI ブームの恩恵を最も直接的に受けている。データセンター向けに GPU サーバー等の生成 AI インフラ構築案件が急増し、売上を大きく押し上げた。また、金融機関向けの PC 導入からサポートまでを一括で行う「ライフサイクルマネジメントサービス」も、ハイブリッドワークの定着やセキュリティ強化を背景に安定成長を続けている。売上の急伸に対し

利益成長が15.2%に留まったのは、一部に利益率の低いプロダクト販売が含まれるためだが、受注残高の積み上がりは将来の運用・保守利益への布石となる。

Figure 2 セグメント別 業績



出所：決算報告会資料、決算短信をもとに Global IR, Inc.作成

フォーカスビジネスと変革の加速

DTSの戦略的成功を象徴する指標が「フォーカスビジネス」である。同社はフォーカスビジネスを「集中投資領域」5つと「先行投資領域」2つの計7領域に定義している。これらの領域は単なる市場トレンドの追随ではなく、DTSが長年培ったドメイン知識（金融・製造・公共）と最新のテクノロジー（AI・クラウド）を掛け合わせたものであり、競合他社に対する差別化要因となっている。

DTSが定義する7つの投資領域は、現在「規模の拡大を牽引する成熟領域」と「将来の利益を担保する戦略領域」が役割を分担しており、全方位で顧客の投資意欲を捕捉している。

現在の成長を直接的に牽引しているのは、5つの集中投資領域、なかでも「クラウド&モダナイゼーション」と「EAS」である。これらは既存の基幹システムを ServiceNow や mcframe、あるいは自社ソリューションへと移行させる実需を捉えており、二桁規模の売上成長と利益率向上を両立させている。

一方で、これから伸びが期待されるのがとりわけ「AI・生成AI」である。後述するとおり理化学研究所から受注したインフラ構築案件は、同領域が「先行投資」の枠を超え、具体的な数億円規模以上のビジネスとして立ち上がり始めたことを示唆している。これに連動し、顧客接点での付加価値を高める「CX」領域が、基幹系とフロントエンドを繋ぐ新たなSI需要を創出する。

以下、各領域の進捗をハイライトする。

① クラウド&モダナイゼーション

保険業向けの大規模な基幹システム再構築プロジェクトや、データセンター事業者向けのハイブリッド環境構築が堅調。顧客サイドにおけるシステムの塩漬けからクラウド移行への不可逆な流れを捕捉し、マイクロソフトの Azure ソリューションパートナー認定を取得するなど、ベンダーとの連携を強化している。

② データ活用

モビリティ事業者向けに散在するデータを統合する基盤開発や、自動車部品メーカー向けに「Informatica」を用いたデータクレンジング支援などを実施している。DXの核心である「データドリブン経営」の土台を支える領域であり、小規模ながらも上流工程のコンサルティング要素が強く、付加価値は高い。

③ セキュリティ&マネージドサービス

ネット銀行向けの金融犯罪対策ソリューション「AMLion」の導入や、証券会社向けのゼロトラストセキュリティ環境の構築を進めている。経済安全保障の高まりを受け、セキュリティは多くの企業において「コスト」から「投資」となっている。DTSは運用の「ReSM」サービスと組み合わせることで、検知から対処までのライフサイクルをカバーしている。

④ Enterprise Application Services (EAS)

「ServiceNow」による社内ワークフローのデジタル化、SAPやmcframeを用いた生産管理の刷新、自社消防ソリューション「FireWeb」の展開が進捗した。本領域は、DTSの「業務理解力」が最も活かされる分野である。特に消防システムは自治体DXの目玉として特徴的な実績を誇る。

⑤ IoT&エッジテクノロジー

物理世界(OT)とデジタル世界(IT)を融合させるソリューション群。具体的には自動車メーカー向けの車載組込ソフトウェア開発や、空港免税店向けのRFIDを用いた棚卸効率化ソリューションが含まれる領域である。グループ会社であるDTSインサイトとの連携により、チップに近いレイヤーからクラウドまでを一気通貫でカバーできるのが同社の強みである。

⑥ AI・生成AI

理化学研究所や民間データセンター向けの生成AI計算インフラの構築案件を受注・実行。また、自社の開発現場での「AIエージェント」によるコード生成をおこなっている。先行投資領域でありながら、理化学研究所案件のような数億円～十数億円規模のインフラ案件を確実に獲得している。2030年度の売上目標100億円に向けて順調な滑り出しを見せている。

⑦ CX（顧客体験価値）

流通系銀行向けのデジタルマーケティング業務支援や、メガバンク向けの「Salesforce」を活用したCRM（顧客関係管理）システムの再構築を受注・実行。銀行の店舗削減・デジタルシフトに伴い、対面と同等の体験をデジタルで提供する需要が急増している。

Figure 3 フォーカスビジネス領域別 実績（2026年3月期 第3四半期）

領域区分	領域名	FY03/2026 第3四半期売上高 実績（億円）	フォーカスビジネス 全体の売上高 に対する構成比	FY03/2026 上半期売上高 実績（億円）
集中投資	クラウド&モダナイゼーション	202	33.3%	139
集中投資	データ活用	19	3.1%	12
集中投資	セキュリティ&マネージドサービス	53	8.7%	34
集中投資	Enterprise Application Services	107	17.6%	70
集中投資	IoT/エッジテクノロジー	77	12.7%	52
先行投資	AI・生成AI	26	4.3%	20
先行投資	CX（顧客体験価値）	21	3.5%	14
その他	-	102	16.8%	71

出所：決算報告会資料をもとに Global IR, Inc.作成

デリバリー品質

IT業界では、要件定義の不備や開発の遅延によって不採算案件が発生することが最大の利益下押し要因となる。しかし、DTSは当期において不採算案件が僅少であることを強調している。

これがなぜ可能なのか、についてであるが、プロジェクト管理体制の徹底に加え、開発工程へのAI適用の検証を進めており、人的ミスの削減と品質の均一化が図られているからであるという。

投資家にとっては利益率の予見可能性が高まることがメリットである。不採算案件が少ないからこそ、第3四半期の営業利益率が12.5%（前年同期は11.4%）へと1.1ポイントも上昇した。

戦略トピックス：最先端 AI・量子コンピューティング領域でのプレゼンス拡大

第3四半期決算における最大の驚きは、理化学研究所から「量子 HPC 連携プラットフォーム向けスーパーコンピュータ」のシステム構築を受注したことである。DTS はソフトウェア開発会社を超えて世界の最先端科学を支えるインフラの設計者としての側面をあらわしつつある。いっぽうで AI に関連するマクロ要因から生じる懸念も出てきている。

AI 実需の象徴としての理化学研究所案件の意義

このプロジェクトは、スーパーコンピュータ「富岳」と量子コンピュータ、さらに生成 AI 向け GPU スパコンを連携させ、従来の計算能力では不可能だった新領域（新薬開発、新素材設計など）の計算を実現するための「オーケストレーション基盤」を作るものである。

技術面では、NVIDIA の高性能 GPU、超高速ネットワーク、さらにはデータセンターの課題である熱対策として「温水冷却技術」を採用している。これらを組み合わせて安定稼働させるインテグレーション能力は、限られた SIer しか持っていない。

また本案件は **AI インフラ市場への参入**も意味している。現在、多くの企業が生成 AI の導入を模索しているが、課題は「計算リソースの確保と最適化」である。DTS が理化学研究所に選ばれた事実は、今後、民間データセンターや自社 AI 基盤を構築したいと考える大手企業にとって、DTS がファーストコールに近い有力な候補になることを示唆している。

生成 AI ブームにおいて、「AI を使う側」のプレイヤーは多いが、「AI を動かすための複雑な基盤を構築できる側」のプレイヤーは国内では稀少である。理化学研究所のプロジェクトで得た温水冷却や高速ネットワーク構築の知見は、次世代データセンターの必須技術であり、DTS はこの領域で国内トップクラスの知見を有する「AI インフラ銘柄」として再定義されるべきである。

外部環境リスクとしての SaaS ショック

2026年2月に発生した、AI エージェントが既存 SaaS を代替するという「SaaS ショック」への懸念は、IT サービスセクター全体を震撼させた。しかし、DTS はこの逆風を「追い風」へと変換する耐性と戦略を備えている。

1. 「人月」から「価値」へのパラダイムシフト

AI による自動化は、従来の「人月積算型」モデルには脅威だが、DTS は「価値ベースのプライシング」への移行を推進中である。製造・テスト工程での AI 適用はすでに検証段階にあり、AI 活用による開発スピードと案件対応力の向上が、そのまま収益性向上に直結する構造を構築している。

2. ミッションクリティカル領域の不可侵性

金融機関などの大規模・基幹システム（ミッションクリティカル領域）において、AIが短期的に人間を完全に代替することは想定しにくい。要件定義をはじめ、品質担保の観点から「人が介在しつつAIをツールとして活用する」プロセスが不可欠であり、DTSが長年培ったドメイン知識（業務理解力）が、AI時代における競争優位性となる。

3. 新たなSI需要の創出：基盤とAIの「結合」

SaaSの代替が進んだとしても、それらをデータ基盤や基幹システムと連携させ、セキュアに運用するニーズはむしろ増大する。理化学研究所案件に代表されるようなAIを動かすための複雑な基盤構築は、AIエージェントには不可能な領域である。DTSはAIインフラの「構築者」として、民間データセンターや大手企業のAI導入に伴うインテグレーション需要を確実に取り込んでいく。

生成AIの開発工程への影響

DTSの主要顧客である金融機関においては、当面は慎重な適用姿勢が継続すると見込まれることから、短期的にAI活用が急速に拡大する状況は想定されない。一方、DTSでは、製造およびテスト工程における生成AIを活用した開発について、既に検証を終えている。これは新規導入というよりも、同社が従来より培ってきた自動化ツールの置き換え・高度化の側面が強い。

現在、大手SIer案件において上流工程を含むAI活用前提の開発標準に準拠したプロジェクトに参画しており、そこで蓄積したノウハウをもとに、DTS独自の開発標準の策定を進めている。今後、自社のプライム案件においてもこの標準を適用し、「価値ベースのプライシング」へシフトすることで、生産性向上が利益率向上へと直結する可能性が高まる。

収益構造の漸次的進化：特定顧客への依存からの脱却

DTSの投資価値における本質的な変化は、収益構造の「質的進化」にある。銀行システム更新サイクルに依存した体質から、自社ソリューションとAIインフラ構築能力を両軸とする、より自律的な成長を遂げる企業へと進化しつつある。

保守的業績予想と来期への期待

第3四半期の営業利益進捗率79.5%は過去最高水準だが、通期予想を据え置いた。その背景には、第4四半期の案件ミックスの変化がある。

利益率の高い銀行向け受託開発が一段落する一方、プラットフォーム&サービスセグメントで利益率が相対的に低い大型プロダクト案件（GPUサーバー等）の計上が予定されている。これは一時的な利益率の鈍化に見えるが、理化学研究所案件などのインフラ構築を完遂させることで、来期以降の運用・保守という「ストック型ビジネス」へ繋げるための健全なプロセスと言える。

第4四半期に保守的な数字を見ている分、来期の期初予想における成長率への期待が一段と高まるとGlobalIRでは分析する。

特定顧客リスクの低減とディフェンシブ・グロースの確立

前年度に存在した「銀行特需」が剥落した期において、過去最高益を更新した事実は、DTSがもはや金融サイクルに依存しない体制を整えたことを意味する。公共、製造、情報通信と、多角化されたポートフォリオは、景気変動に対する耐性（ディフェンシブ性）と、DX需要を取り込む成長性（グロース性）を同時に備えるに至った。

DTSの第3四半期決算は、同社が推進してきたフォーカスビジネスへのシフトが期待以上のスピードで実を結んでいることだけでなく、メガバンク案件の谷間を量子HPCインフラで埋め、最高益を更新する実行力を証明した。この実績はPER16倍台といった現状の評価を大幅に上回っている。短期的なセンチメントに左右されず、構造的進化を遂げた「新生DTS」の真値を見極めるべき局面になっている。



Figure 4 連結業績

決算期	売上高 (百万円)	前年比 (%)	営業利益 (百万円)	前年比 (%)	経常利益 (百万円)	前年比 (%)	当期利益 (百万円)	前年比 (%)	EPS (円)	PER (倍)
FY03/2016	82,537	110.6	7,599	118.2	7,707	118.2	4,341	117.6	186.6	11.5
FY03/2017	79,858	96.8	7,986	105.1	8,093	105.0	5,121	118.0	222.4	12.4
FY03/2018	83,163	104.1	8,523	106.7	8,574	105.9	5,765	112.6	247.9	14.8
FY03/2019	86,716	104.3	9,789	114.8	9,929	115.8	6,817	118.2	292.2	14
FY03/2020	94,618	109.1	10,674	109.0	10,849	109.3	7,317	107.3	158.0	11.9
FY03/2021	90,493	95.6	10,817	101.3	11,131	101.3	7,593	103.8	165.4	15.2
FY03/2022	94,452	104.4	11,196	103.5	11,403	102.4	7,853	103.4	172.7	15.5
FY03/2023	106,132	112.4	11,694	104.4	11,932	104.6	8,001	101.9	181.4	17.7
FY03/2024	115,727	109.0	12,508	107.0	12,831	107.5	7,293	91.1	168.5	23.8
FY03/2025	125,908	108.8	14,489	115.8	15,457	120.5	10,635	145.8	253.8	15.7
FY03/2026 会予	135,000	107.2	15,500	107.0	15,850	102.5	10,900	102.5	-	-

出所：会社有価証券報告書および会社 IR 資料をもとに Global IR, Inc.作成

Note：百万円以下四捨五入、小数第二位四捨五入、会予=会社予想



経営指標

財務データ(連結：四半期毎) (百万円)

決算期	FY03/2022	FY03/2023	FY03/2024	FY03/2025	FY03/2026				通期 (会予)
					Q1	Q2	H1	Q3	
営業収益	94,452	106,132	115,727	125,908	32,908	34,018	66,926	31,409	135,000
前年比(%)	103.3	110.0	109.0	108.8	113.9	109.9	111.8	100.8	107.2
税引前利益	11,384	11,637	11,592	15,131	3,946	4,286	8,232	4,455	15,850
前年比(%)	102.6	102.2	99.6	130.5	130.1	119.5	124.6	111.3	104.8
税引前利益率(%)	12.1	11.0	10.0	12.0	11.2	12.6	12.3	14.2	11.7
純利益	7,837	8,005	7,293	10,635	2,696	2,770	5,466	3,125	10,900
前年比(%)	102.7	102.1	91.2	145.8	132.1	114.3	122.7	112.9	102.5
純利益率(%)	8.3	7.5	6.3	8.4	8.2	8.1	8.2	9.9	8.1

一株当たりデータ (連結)

決算期	FY03/2021	FY03/2022	FY03/2023	FY03/2024	FY03/2025
発行済株式総数(千株)	50,445	49,073	47,591	46,854	41,498
EPS	165.49	172.78	181.41	168.51	253.80
EPS 調整後	-	-	-	-	-
BPS	1293.61	1376.05	1408.81	1451.61	1440.87
DPS	60.00	70.00	120.00	103.00	127.00

キャッシュフロー (百万円)

決算期	FY03/2021	FY03/2022	FY03/2023	FY03/2024	FY03/2025
減価償却費	535	532	608	628	703
営業活動によるキャッシュフロー	9,459	7,589	7,642	10,410	9,181
投資活動によるキャッシュフロー	-787	-139	-931	-8,516	-2,322
財務活動によるキャッシュフロー	-3,848	-5,025	-9,095	-7,817	-16,087

財務データ (%)

決算期	FY03/2021	FY03/2022	FY03/2023	FY03/2024	FY03/2025
総資産利益率(ROA)	10.1	9.9	9.9	8.8	13.2
自己資本利益率(ROE)	13.3	13.0	13.0	11.8	17.7
自己資本比率	78.8	78.4	76.1	73.4	72.2

出所：会社有価証券報告書および会社 IR 資料をもとに Global IR, Inc.作成

Note：百万円以下四捨五入、小数第二位四捨五入、会予=会社予想



免責事項

本レポートは、掲載企業のご依頼により Global IR, Inc.が作成したものです。

本レポートは、情報提供のみを目的としており、当該企業株式への投資勧誘や推奨を意図したものではありません。本レポートに記載されている情報及び見解は、Global IR, Inc.が信頼できると判断した情報源から得、または公表されたデータに基づいて作成したものです。その正確性・完全性を全面的に保証するものではありません。しかしながら、正確性、客観性を重視した分析を心がけ、最終的な中立性・独立性には最善の注意を払っています。また、当該企業経営者等とのディスカッション、および独自のリサーチに基づき、我々が投資家にとって重要と思われる視点を Global IR, Inc.のオリジナル・オピニオンとして提供しています。Global IR, Inc.は本レポートの使用により発生した損害について一切の責任を負いません。当該企業株式への最終的投資判断はあくまでも自己の判断・責任でお願いします。